勤勞例

則定應進階、

〔新撰字鏡〔イ〕仂六翼反、入、勤也、仂同、伊曾志久、

〔倭訓栞前編伊〕〔三〕いそし　日本紀に勤字、新撰字鏡に仂字をよめり、續日本紀にいそしみとも見えたり、いさをしをいふ、さを反そ也、今もいそ〳〵するともいへり、天平、檜原東人に賜ひし伊蘇志臣の姓も同義なり、

〔歷朝詔詞解〕伊蘇志は常には勤字を書て、古書に多き言也、伊蘇は伊佐乎の切れるにて、いそしはいさをしと同じ、

〔日本書紀七景行〕四十年十月癸丑、日本武尊發路之、○中略既而崩于能褒野、時年三十、天皇聞之寢不安席、食不甘味、晝夜嗟咽泣悲摽擗、因以大歎之曰、我子少碓王、昔熊襲叛之日、未及總角、久煩征伐、既而恒在左右、補朕不及、然東夷騷動、勿使討者、忍愛以入賊境、一日之無不顧、是以朝夕進退、佇待還日、何禍兮、何罪兮、不意之間、倏亡我子、自今以後、與誰人之經綸鴻業耶、○中略是歲天皇踐祚四十三年焉、

〔釋日本紀十述義〕筑前國風土記曰、怡土郡、昔者穴戸豐浦宮御宇足仲彥天皇、將討球磨噌唹、幸筑紫之時、怡土縣主等祖五十跡手聞天皇幸、拔取五百枝賢木、立于船舳艫、上枝挂八尺瓊、中枝挂白銅鏡、下枝挂十握劍、參迎穴門引島獻之、○中略天皇於斯譽五十跡手曰、恪手、謂伊蘇志○五十跡手之本土可謂恪勤國、今謂怡土郡訛也、○又見日本書紀

〔日本書紀二十敏達〕元年五月丙辰、天皇執高麗表疏、授於大臣、召聚諸史、令讀解之、是時諸史於三日內、皆不能讀、爰有船史祖王辰爾、能奉讀釋、由是天皇與大臣、俱爲讚美曰、勤乎辰爾、懿乎辰爾、汝若不愛於學、誰能讀解、宜從今始近侍殿中、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年三月戊戌、駿河國守從五位下檜原造東人等、於部內廬原郡多胡浦濱、獲黃金獻之、練金一分沙金一分於是東人等賜勤臣姓、